

独立フィンランドにおける自国史の「創造」

石野裕子

はじめに

問題の所在

本稿は、二〇一三年六月二日に開催された立教大学史学会のシンポジウムでの発表内容に加えて、コメントおよび質疑応答で出てきた議論を踏まえ、独立フィンランドにおける自国史「創造」の一例とその「創造」の背景および「大フィンランド」思想との関係について論じたものである。¹⁾

一九世紀から二〇世紀にかけて、ヨーロッパ各地で国民国家が誕生した。それら新興諸国では、新たに誕生した国民の統一を図るために、「過去」の共有すなわち自国史の編纂が進められていったことは知られるところである。また、その編纂の過程では神話、伝承、伝統といった要素を

利用して、自国史の正当性を証明しようとする試みもなされてきた。一九一七年一月六日にロシアからの独立を宣言し、共和国として新たな一步を踏み出したフィンランドも例外ではない。本稿では、その独立フィンランドにおいても登場し、フィンランドの歴史学界のみならず、フィンランド社会においても広く受け入れられた代表的な自国史を取り上げ、その自国史像が「創造」された背景を考察する。

なかでも、両大戦間期における特徴的な自国史像を掲げた歴史学者ヤルマリ・ヤーッコラ (Jalmari Jaakkola、一八八五～一九六四) の著作を取り上げる。ヤーッコラは、フィンランド中世史を専門とし、一九二三年にヘルシンキ大学史学科の北欧史担当の講師に就任し、一九三二年には同学科の教授に任命され、新しく設置されたフィンランド史の講座を担当した経歴を持つ歴史学者である。そもそも、

独立フィンランドにおける自国史の「創造」（石野）

ヘルシンキ大学では一九三二年以前までは独立したフィンランド史の講座を設置しておらず、フィンランド史はロシア史及び北欧史の講座内でロシア史、あるいは北欧史の一部として教えられていた。それゆえ、一九三二年のフィンランド史の講座設置は、フィンランドの歴史学界における重要な転機であり、独立フィンランドにおける自国史確立に向けた体制がようやく整ったといっても過言ではない。

その自国史確立の先導役を担ったともいえるヤーッコラは、むろん当時のフィンランドを代表する歴史学者であり、彼がフィンランドの歴史学界に及ぼした影響は大きいものであった。しかし、第二次世界大戦後に彼の名声は消え去り、現在ではヤーッコラは「極端な歴史学者」というレッテルが貼られてしまい、彼の業績は忘れ去られてしまっている。なぜならば、彼が描いた自国史像があまりにもイデオロギー色が強いとされ、第二次世界大戦以降のフィンランドの歴史学界では無視され続けてきたからである。そのイデオロギー色とは、「大フィンランド」思想との関係を目指す。

「大フィンランド」思想とは、フィンランド領を拡張するためにロシア・カレリアからエストニアまでを含む領土獲得を意図した膨張論であり、特にロシア・カレリアを対象としたものである。そもそも、「大フィンランド」思想

は、使用言語が類似していることから一部のフィンランド人知識人が抱いたカレリア人への近親民族意識が出发点であり、一八世紀以来存在してきた思想であった。しかし、独立を契機に、フィンランドでは「大フィンランド」思想はカレリア人が主に居住するとされたロシア・カレリア併合という目標が掲げられ、「大フィンランド」実現を求める運動がフィンランド社会において大きな影響力を持つようになり、第二次世界大戦期には、フィンランド政府が「大フィンランド」実現のための軍事活動までを起こすに至ったのである。ヤーッコラが描いた自国史像は、そのような「大フィンランド」思想と重なるものであり、同時に「大フィンランド」の正統性を裏付ける史料としても利用されたのである。

本稿では、ヤーッコラが描いた自国史に注目し、どのような学術的、社会的背景のもと、特徴的な自国史が「創造」されたのかを明らかにすることが目的である。始めにどのような自国史をヤーッコラが描いたのかを示すために彼の歴史観の特徴を挙げ、次にそれらの特徴がどのような学術的、社会的あるいは政治的背景を有しているのかを考察する。

ヤーツコラが「創造」した自国史像

(一) 歴史史料としてのカレワラ叙事詩

ヤーツコラが描いた自国史の特徴は、一九五四年にヘルシンキ大学を定年退職する際に彼が述べた「ヴァイナモイネンからスヴィンフツヴドまでのフィンランド史を書くことが夢である」という言葉に集約されるだろう。ヴァイナモイネンとは、叙事詩『カレワラ』に登場する、生まれた時から老人であった魔法使いの主人公であり、スヴィンフツヴドは独立時のフィンランド初代摂政である。この言葉は冗談めかして述べたとされるが、実際、ヤーツコラが著した自国史には、叙事詩『カレワラ』の原詩であるカレワラ叙事詩が歴史史料として用いられているのが大きな特徴となっており、彼の歴史学者としてのキャリアもカレワラ叙事詩の歴史的解釈の研究が出发点となっている。

『カレワラ』とは、一八三五年に医師エリアス・ロンルートがカレリア地方を中心に口承で詠われてきた叙事詩を採集し、文字化したものである(一八四九年に新版が刊行)。ヤーツコラが叙事詩『カレワラ』を歴史史料として持ち出したことは一見奇妙に見えるかもしれないが、『カレワラ』はフィンランド人の民族的起源の追究の中から誕生した叙事詩であり、カレワラと歴史とのつながりを考えること自

体は当時のフィンランド人知識人らの考えから大きく逸脱するものではない。

例えば、ロシア統治時代初期の代表的な知識人であり、トゥルク・ロマン主義運動と呼ばれたフィンランドの文化運動の中心的人物であったA・I・アルヴィドソンは、民俗詩を民族の起源と歴史的発展を結ぶ大事な要素とみなしてその採集に力を注いだ⁵⁴。トゥルク・ロマン主義後に花開き、その伝統を受け継いだヘルシンキ・ロマン主義運動においても、民俗詩の採集が盛んに行われたが、その過程で編纂されたのが、叙事詩『カレワラ』であった。編者のロルート自身、古代の祖先の生活様式を叙事詩に見出そうとし、また、フィンランド民族の歴史も反映されていると考えたのは知られている。『カレワラ』刊行以降、フィンランドでは民俗学が発展したが、それでも『カレワラ』編纂以前のカレワラ叙事詩の歴史的起源についての議論がしばしば起こっており、ヤーツコラの研究もそういった民俗学の潮流に影響を受けたといえる。

一九二三年にヘルシンキ大学史学科講師に就任したヤーツコラは、同年にフィンランド文学協会で『カレワラ英雄叙事詩の歴史的起源について』を発表する。この発表で、ヤーツコラは故郷サタクンタ地方の地名と家族名にカレワラに登場する英雄名が存在することを指摘し、彼らは実際

にこの地に居住し、そこから遠征した人物であったことを主張した。⁶⁾ここでのヤーツコラの主張は、カレワラ叙事詩そのものを一つの歴史史料とみなすべきであるとする主張であった。つまり、ヤーツコラのカレワラ解釈は、従来のカレワラ解釈の影響を受けているが、加えて新たな歴史解釈を行った点に特徴を見出せる。

この発表以降、ヤーツコラは、カレワラ叙事詩を一つの歴史史料としてフィンランド古代史研究に活用していく。その代表的研究が、一九三五年に出版されたヤーツコラ初の単著である『フィンランド古代史——部族の時代と「カレワラ文化」』である。同書はフィンランド史叢書の第二巻にあたるもので、またカレワラ出版百周年にあわせて出版されたものである。同書でヤーツコラは、言語学、考古学、地名学の手法を用い、従来考古学の分野でしか研究されてこなかった「フィンランド古代史(八〇〇〜一〇〇〇)」の存在を指摘し、同時代を、優れた文化を有し、フィンランドの独立性が見られると主張した。⁷⁾その歴史史料として使用したのが、カレワラ叙事詩およびフィンランドで伝承されてきた口承詩であった。

同書はあくまで研究書の位置づけにあり、対象時期はフィンランド古代に限定されたものであったが、ヤーツコラはその後、フィンランド古代に引き続き、それ以降の時代

におけるフィンランドの独自性を主張する研究を続けた。その集大成ともいえるものが一九四〇年に出版された『フィンランド史の概説』である。

『フィンランド史の概説』は、ヘルシンキ大学史学科の基礎教科書としても使用された本であるが、一九四二年に第三版が発行されるベストセラーにもなったように、一般読者にも読まれた本であり、注もなく、全二〇三頁と簡潔にまとめられている。

同書が扱う時代は、「フィンランド古代(八〇〇〜一〇〇〇)」からフィンランド独立を経て、一九四〇年の現状に至るまでの時代であり、同書はまさしくヤーツコラが描いた自国史として位置づけられよう。

同書は、全二六章のうち、「フィンランド古代」の叙述に五章を割き、フィンランド古代においてすでにフィンランドが独自性を有し、かつ独立性を有した地域であったことを強調する。

同書でのカレワラ叙事詩に関する主張は、以下にまとめられる。カレワラ叙事詩の発生地はフィンランド南西部に位置するサタクンタ地方であり、その地は古代フィンランドの「関心圏すなわち利益圏」であり、農業地域でもあり、豊かな漁業地域でもあった。詩は、同地から東へと移動し、一方では北の沿岸を通過してロシア・カレリアへと移動し、

定着した。カレワラの内容はヴァイキング時代の史実と重なるため、歴史史料としての価値が存在する。^⑧

次にヤーツコラは、カレワラは部族の詩であるのか、それとも歴史的な詩であるのかという問いを立て、それに対してカレワラにはその両方の側面が存在するが、前者は主にカレリア人の視点だけで説明されてきたと指摘し、後者の歴史的な詩の意味をより強調する。その際、ヤーツコラは、カレワラ英雄詩は強力な「歴史的接触」とそれらが創造した「関心圏すなわち利益圏」に起因するという表現をし、カレワラと史実との関係を指摘する。その「歴史的接触」とはヨーロッパとの接触を指し、「関心すなわち利益圏」とはサタクンタ地方を指すが、ヤーツコラは以下のように説明する。

まず、海（バルト海）で展開された世界史が発展する八〇〇年から一一〇〇年の間にフィンランドの輪郭がはっきりとし、その外的な影響がフィンランド内部の発展、すなわち古代農業地域の形成につながった。^⑨ その農業地域とは、（南西フィンランドの）トゥルク地域のカランティ及び上サタクンタである。また、貿易関係及びコケマキ川の豊かな漁業を基盤としたこれらの地域を古代フィンランドの「狩猟圏」と位置づける。^⑩ さらに北方への商業路が開通すると、この地域は古代フィンランドにおける「関心圏す

なわち利益圏」になるが、その証拠として古代フィンランドの海の詩、農業の詩、そしてカレワラを中心とした英雄詩にこの地域の描写が見られる。^⑪ 以上のように、ヤーツコラはカレワラを始めとするフィンランド詩での描写及び詩の移動経路を歴史的証拠として、古代における同地域の特殊性を主張したのである。

また、ヤーツコラはカレワラの詩を史実と照らし合わせ、カレワラが創造された時代を推測する。ヤーツコラによると、古代フィンランドの海を描写する詩としてカレワラの登場人物の一人であるレンミンカイネンに関する詩を挙げ、それらには「キリスト教時代」を示すものは何もない。^⑫ 反対に、例えばカレワラの偽の金の娘の製造話と英雄スタルカッドが「汚い」方法で金の鍛冶屋が愛する王の娘を罰するというヴァイキングの話と比較することで、フィンランドの海を描写する詩とヴァイキング時代の特徴には類似点が見出され、同じ海の世界が描かれたと指摘する。^⑬ つまり、このような類似点からヤーツコラは、レンミンカイネンの一連の詩がヴァイキング時代にすでに創造されたものであると主張する。^⑭ 以上のように、ヤーツコラはカレワラ叙事詩がキリスト教到来以前のフィンランド、すなわちヴァイキング時代においてすでに創造された独自の文化であり、歴史的証拠であると位置づけたのである。

的な位置並びに動物学的、植物学的に、フィンランドはフェンノ・スカンディアに属する。フェンノ・スカンディアは、全体としてライオンのような形をしており、竜骨が集まった体と背中にスウェーデンとノルウェー、そして爪と胸にフィンランドがある。氷河期時代の終わりに、東ヨーロッパの本土から分れたフィンランドの東側は地理的なつながりがある。フィンランドの水路であるネヴァ川―ラドガ湖―シヴヴァリ川―オネガ湖―白海は、失われた古代の水路を今も描き出す。地理的にフェンノ・スカンディアは、独自のヨーロッパ像を描く。その特徴もポホヨラという名前が示すように明らかである。フェンノ・スカンディアは地理的に厳密ではないが、文化的にはデンマーク、アイスランドとは区別される⁽²²⁾。

以上のように、ヤーツコラは「フェンノ・スカンディア」をノルウェー、スウェーデン、フィンランドと規定し、「フェンノ・スカンディア」という地域におけるフィンランドの勢力範囲をロシア・カレリア、コラ半島まで含めて想定したのである。

「東の道」

次に取り上げるのは、「東の道」である。この概念自体

はヤーツコラ自らが著書で指摘するように北欧の歴史学界で使用されてきた用語であり、ヤーツコラが初めて提唱したのではない⁽²³⁾。しかし、ヤーツコラは、人々の移動経路として使用されてきた「東の道」を、フィンランド民族の起源につなげ、さらにはフィンランドの独自性の発展につなげて考察することで、新たな解釈を加えた。

『フィンランド史の概説』で、フィンランド民族と海の道との関係を指摘した箇所を以下に引用したい。

ゲルマン民族がスウェーデンを支配した時、フィンランド民族は海を通って西側から移動しなければならなかった。フィンランド民族とその文化は、これまで通常想定されていたのとは反対に南と西から来た海風の下で成長し、発展したのである。海の下つながりとともに、フィンランドの地理的特徴と交通手段は、決定的にフィンランド民族とその文化の誕生に影響を与えたのであった⁽²⁴⁾。

以上のように、ヤーツコラは「東の道」を通じてフィンランド民族が到来したという説を提唱する。また、フィンランドには数多くの水路が存在したため、豊かで多方向の交通路が形成され、このような水路はボスニア湾と白海の間のつながりを形成したとする⁽²⁵⁾。

さらに、ヤーツコラは「東の道」に新たな解釈を加える。

その一つは「東の道」が海の道だけではなく、陸に上がりカレリアまで延長した道とみなす解釈である。同書によると、それ以前に外国に征服された経験がないフィンランドは、緊密にそして整然とヨーロッパ及びスカンディナヴィアに「合流」した。そして、「東」と「西」の間の貿易幹線が、今まで前例がないような繁栄を得てその地域に出現した。さらに、この新しい幹線はカレリアまで延び、西フィンランドーハメーカレリアという道が形成されたとする⁽²⁶⁾。

ヤーツコラは、古代におけるフィンランド民族の独自性という解釈をも加える。例えば、「東の道」に言及する前の章でヤーツコラは、水路が多いフィンランドの特徴を以下のように表現する。

このような地理的条件は、フィンランドが東・中央ヨーロッパ、バルト諸国のように他の国に結合したり、社会生活を閉鎖されたりする可能性が一度もなかったことを示す。反対に、スカンディナヴィアに移住した多くの共同体のように、フィンランドの共同体が初めから自由であり、順応性があつたことは明らかである⁽²⁷⁾。

以上のように、ヤーツコラは「東の道」を通じてフィンランド人がヨーロッパ大陸からフィンランドに辿りついた

という説を唱えるだけではなく、フィンランド人から派生したハメ人がカレリアまで伸びた「東の道」を通じてラドガ湖西北に移住し、これに東から原フィンランド人が加わってカレリア人が形成されたと主張する。さらには、フィンランド民族の独自性、フィンランドの共同体の先進性を強調する⁽²⁸⁾。すなわち、ヤーツコラは「東の道」という概念を用い、フィンランド民族の起源を主張しただけではなく、この道を通じてカレリア人がフィンランド人から派生した民族であると主張したのである。

「東と西の間のフィンランド」

最後に取り上げるのは、「東」と「西」の間のフィンランドという概念である。「東の道」と同様に「東と西の間のフィンランド」という概念自体も当時から特に珍しいものではなく、フィンランド独立以前より使用されており、冷戦期においても政治家などが使用してきた概念であり、フィンランドの歴史学界はもとより一般的にも使用されてきた用語でもあるが、「東」と「西」が何を指すのかはそれぞれ異なっている。

ヤーツコラにとって、「西」はスウェーデンだけではなく、ヨーロッパ大陸を意味し、歴史的にフィンランドが「野

蛮な東」、すなわちノヴゴロド(ロシア)からの脅威から「西」を軍事的にも文化的にも防衛してきた前哨地であることをこの概念を用いて強調する。

その際、ヤーツコラはフィンランド最古の国境線について自説を展開するが、すでに研究初期の一九二六年の『史学雑誌』に発表した「我々国家の最古の国境線について」で以下のように明確に主張する。

フィンランドの東側及び西側の境界線は、東洋と西洋の文化圏がぶつかる場所である。それゆえ、フィンランド最古の国境線の問題はヨーロッパ文化史の一部であり、歴史的な重要性が存在する。従来、スウェーデン(フィンランド)とノヴゴロド(ロシア)との間の国境線は、一三二三年のパハキナサリ条約によって初めて形成されたとされており、フィンランドにおいてもスウェーデンを起源とする見方か、トゥルク中心の見方、すなわちスウェーデンを起源とする見解がなされた。それらの見方では、フィンランド最古の国境線はスウェーデンの「征服」に続いたものと自動的にみなされている。しかし、我々の国家はスウェーデンが見なしたような、「スウェーデンの征服」もししくは、キリスト教プロバガンダによって形成された古代地域ではない。パハキナサリ条約以前に、すで

に、フィンランドはサタクンタ、ハメといった「国(maakunta)」に分かれ、それぞれの勢力範囲が存在した。例えば、古代ハメは、始め西に居住地を得たが、南や東へ徐々に勢力を広げていった。ハメと西フィンランドへの有機的連携が起こったことで、古いハメとカレリアの間の境界線が「ロシアの境界線」とされた。そのような経緯は、パハキナサリ条約の国境線上の地域名を詳細に研究した結果明らかとなった。それゆえ、一三二三年のパハキナサリ条約で公的に、スウェーデン・フィンランドとノヴゴロド間の国境線が定められたとされているが、それ以前にも文献には残っていない国境線が存在したのであった。フィンランド最古の国境線は、ハリツコ湾からハメ地方のリロンキヴィを通して、ボスニア湾のリュツサロンまでの線を描き、次に、フィン人がハメ人を征服する段階で境界線が東側へ移動した。この西フィンランドへのハメの融合は一〇〇年かかった。そして、東と西の間でフィンランドが繁栄したのであった。他にも勢力圏の境界(intressiraja)は存在していた。そのような最古の国境線から考察すると、フィンランドは独自の国家形態をすでに有したのである。²⁰〔括弧―筆者〕

ヤーツコラが一九三三年に行ったヘルシンキ大学史学

独立フィンランドにおける自国史の「創造」(石野)

科教授就任講演においても、上記と同様の説を展開し、さらにパハキナサリ条約の三年後にスウェーデン・フィンランドがノルウェーと条約を締結したことで一種の連帯が生まれたが、その連帯は後の「フェンノ・スカンディア」の東方政策に続くものであったと主張する。さらに「フェンノ・スカンディア」の解釈で見られたように、ヤーツコラはフィンランドをスウェーデンと対等な立場に位置づける。すなわちフィンランドは、スウェーデンに統治される以前にすでに独自の政治権力形態を有し、スウェーデンと「共」に東のノヴゴロドに対して戦いを繰り広げ、国境線を形成したと見なすのである。以上のような主張は、『フィンランド史の概説』にも反映されており、フィンランドがスウェーデン統治下に入る以前にすでに独自の政治権力形態を有し、スウェーデン統治時代も独自性を保ち続けたことを一貫して主張する。^{②③}

以上のようなヤーツコラの歴史観は、かつての宗主国スウェーデン、ロシアとは異なるフィンランドの独自性を主張するものであるが、独立以降にフィンランドの歴史学界で取り上げられ、議論された「スウェーデン・フィンランド(Ruotsi-Suomi)」という概念^④、すなわちフィンランドはスウェーデン統治時代においてすでに独自の国家的形態を有していたという主張にも通じるものである。つまり、

ヤーツコラの自国史像は、当時のフィンランドの歴史学界の潮流の影響を受けたものであった。しかし一方で、これまでほとんど言及されなかった、スウェーデン統治時代以前の「前史」であったフィンランド古代史に注目し、この時代こそがフィンランドの原点であるという主張に、他の歴史学者とは異なる点が見出せる。また、その主張は、カレワラ叙事詩を歴史史料として解釈する上で成り立っているものであるという点に注目すべきであろう。

ヤーツコラの自国史像が生み出された背景

以上のようなヤーツコラの自国史に投影された歴史観は、独立以降のフィンランドの歴史学界の変化を背景に生み出されたものであるといえる。

六世紀もの長きに渡るスウェーデン統治の影響で、ロシア統治後も住民のほとんどがフィンランド語を母語としている状況下、エリート層はもっぱらスウェーデン語系フィンランド人が占めており、彼らがフィンランド史叙述を担ってきた。彼らは当然、スウェーデン本国の歴史学者の研究書、あるいはスウェーデンを介したヨーロッパの歴史研究から学ぶことになり、必然的にフィンランド史もそれらから知識を得た。一九世紀後半に入ると、これまでラテン

語もしくはスウェーデン語で行われていた授業に加えて、フィンランド語での授業が神学部を皮切りに開始された。³¹このことは、フィンランド語を母語とするフィンランド人が大学に進学するようになったという背景があり、換言すると、フィンランド語を母語とするエリート層が大学で育成されることになり、独立以降、教授職等の教育職に就く者が輩出されるようになった。ヤーツコラは、サタクンタ地方の豪農の息子で、フィンランド語を母語とするフィンランド人であり、まさに大学におけるフィンランド語系フィンランド人知識人が台頭した時期と重なる。ヤーツコラが大学生だった時期においても、スウェーデン人歴史学者が描くフィンランド人像は「アジア起源」説が多く、フィンランド人は「劣ったアジア」起源で、「樺皮文化」と揶揄されるような原始的な文化しか有していない民族であるとされていた。³²また、当時大学で使用されていた歴史教科書も、フィンランドの扱いはスウェーデン史の一部にしかず、フィンランドの独自性が描かれているのは稀であった。そういった意味で、ヤーツコラはスウェーデン、さらには狭い意味でのスウェーデン語系フィンランド人のアカデミズム支配からの脱却を図ったフィンランド語系知識人の一人であったといえるだろう。

また、自国史が求められていた社会的背景は、独立と

いう契機だけではない。前述したように、フィンランドは一九一七年二月六日に独立を宣言し、共和国として成立した。しかし、翌年の一九一八年一月に独立したての国が二分した内戦が勃発した。既存の権力層を中心とした白衛隊と共産主義を主張する赤衛隊との戦いは半年弱で決着がついたものの、死者が五万人以上にのぼるなど大きな傷跡として残った。³³それゆえ、独立したてのフィンランドでは、内戦で二分された国内をどのように統合していくのが最優先の政治課題となった。以上のように、国民が共有できる自国史が一層求められていた背景が存在しており、ヤーツコラが描いた自国史像が受け入れられる社会環境にあったのである。

上記の学術的背景および社会的背景に加えて、政治的な動向もヤーツコラの自国史像が誕生し、支持された背景として挙げられる。それは、「大フィンランド」思想の政治化である。

「大フィンランド」思想は、前述したように一部のフィンランド人知識人のカレリア人への「近親民族」意識から発生したものであるが、フィンランド独立が射程に入った二〇世紀初頭から、政治的色彩を帯びるようになり、カレリア人が主に居住されたとするロシア・カレリアを含めたフィンランド独立が一部の活動家や政治家によって構想さ

独立フィンランドにおける自国史の「創造」(石野)

れるようになった。このような「大フィンランド」思想の政治化は、内戦時には白衛隊側の「東カレリア」遠征によって軍事的に実現が試みられた。この試みは失敗に終わったが、「大フィンランド」思想は消滅することはなく、両大戦間期には学生団体等の間で引き継がれ、「大フィンランド」の実現に向けた活動が展開された。

フィンランド政府は、このような活動に対して冷静な対応をとっていたが、第二次世界大戦期に勃発した対ソ戦争が引き金となり、「大フィンランド」思想が再び政治色を帯びることとなった。

一九三九年一月に、フィンランドとソ連の間で勃発した第一次対ソ戦争である「冬戦争」は、フィンランドの敗北に終わり、一九四〇年三月に休戦条約が締結された。同条約で、フィンランドはカレリア地峡を始めとする領土の一〇分の一をソ連に割譲した。つまり、フィンランドは自国領カレリア地域を失ったのである。

『フィンランド史の概説』が出版された一九四〇年は、まさに「冬戦争」が終結した時期であり、戦争に負け、自国領カレリアを失った喪失感を抱いたフィンランド人にとって、ヤーッコラが描いた自国史像は歓迎されるものであった。ヤーッコラ自身、冬戦争時に、だれもが認めるような祖国の歴史学説がないことに気づいたので、同書を執筆

したと序文で述べている。⁸⁵⁾

スウェーデン統治時代以前の時代にあたる八〇〇〜一〇〇〇年に、ロシア・カレリアおよびコラ半島を勢力範囲に含む「大フィンランド」の存在が主張した同書は、「大フィンランド」思想の歴史的正当性を証明するものであった。

同書は、あくまで自国史として発表され、流通したが、同書を土台とした政治的プロバガンダ本が一九四一年に出版された。同書に目をつけたフィンランド政府がヤーッコラに対して、「大フィンランド」実現のための根拠となる覚書執筆を依頼したのである。一九四一年六月一二日に完成した覚書「東カレリアとコラ半島問題」は、ドイツ語に翻訳され、ドイツ政府関係者へのプロバガンダ資料として利用され、さらには『フィンランドの東方問題』と題名を変え、内容も一部変更したものが、一九四一年に市販された。同書は、スウェーデン語版、フィンランド語版だけでなく、ドイツ語版、英語版、フランス語版も作成された。同書は、「大フィンランド」実現のために書かれたプロバガンダ本であり、いかにフィンランドがロシア・カレリアを獲得する正統性があるのかが主張された内容であったが、歴史的記述に関しては一九四〇年の『フィンランド史の概説』の内容と同じであった。つまり、ヤーッコラが

描いた自国史像は、政治的色彩を帯びた形で世界に喧伝することにつながったのである。³⁹⁾

終わりに

ヤーッコラが描いた自国史は、フィンランドがロシア史の一部、あるいはスウェーデン史の一部であることを否定し、フィンランド独自の歴史が存在することを主張したものであった。また、スウェーデン統治時代以前からフィンランドが、「大フィンランド」の領域、すなわちロシア・カレリアおよびコラ半島一帯までの領域を有していたことを証明しようとするものでもあった。このような自国史は、これまでのフィンランドの学問潮流からは大きく逸脱したものではないが、ヤーッコラ独自の解釈によって、独立フィンランドにおいて歓迎される要素が多数含まれるものとなった。つまり、フィンランドは一九一七年に独立を果たした新興諸国であるが、過去、すなわちスウェーデン統治時代以前の遙か以前にすでに独立形態を有していたとする国家でもあるという要素で、いわばフィンランドの歴史的正統性を証明する要素であった。また、ヤーッコラが描いた自国史は、カレワラ叙事詩という神話的要素抜きでは語ることができない点が大きな特徴であった。カレワラ叙事

詩の史実化が土台となったフィンランド古代史の存在こそが、ヤーッコラの自国史の核であったが、言い換えると、そこにしかスウェーデンでもなく、ロシアでもない、フィンランドの独自性が見出せなかったのである。

ヤーッコラの自国史像は「大フィンランド」思想と重なるものであり、「大フィンランド」実現を目指した政治活動、さらにはフィンランド軍部のプロパガンダ活動にも用いられるに至ったが、そこには、独立時に画定された境界線の引き直しと民族概念の問い直しという独立フィンランドが抱えていた課題が見出されるのではないだろうか。

東欧と呼ばれたヨーロッパ地域の新興国家でも同様の思想が発生したように、「大フィンランド」思想のような膨張論は、両大戦間期におけるヨーロッパの思想潮流と関連性が見出されるが、他国と異なり、なぜ両大戦間期のフィンランドにおいて「大フィンランド」思想が社会に浸透し、あらゆる階層を巻き込んだ形で運動化していったのかについては、今後の課題としたい。

独立フィンランドにおける自国史の「創造」(石野)

註

(1) なお、本稿は、二〇一一年三月に津田塾大学に提出した博士論文(「フィンランドの叙事詩カレワラ研究とフィンランドの国民国家形成」)を基にした拙著『「大フィンランド」思想の誕生と変遷——叙事詩カレワラと知識人』岩波書店、二〇一二年を土台として、自国史の「創造」に焦点を当てて再構成し、論じたものである。

(2) 一八六〇年初頭、ヘルシンキ大学の前身である帝政アレクサンドル大学でフィンランド・北欧・ロシア史の三講座が設けられていたが、独立後の一九二四年にフィンランド・北欧史という講座名となり、ロシア史が抜け落ち、フィンランド史は北欧史の一環で教えられていた。Päivio Tommila, *Suomen historiankirjoitus: Tutkimuksen historia*, Porvoo: WSOY, 1989, s. 179.

(3) 特に、両大戦間期における歴史学、特に自国史の叙述と「大フィンランド」思想の関係については、言及されることはほとんどなかった。一九七六年にアメリカの民俗学者ウィリアム・A・ウイルソンが「大フィンランド」思想が自国史に反映されていることを指摘したものの、フィンランドにおいては追随するような研究は登場しなかった。二〇〇七年に入って、歴史学者オシモ・ユツシラが『フィンランド史の大きな神話』と題した著書で、フィンランド史叙述の「神話」を取り上げ、両大戦間期における自国史とそれ以前の歴史叙述との連続性を指摘したが、ヤーッコラの自国史叙述を相対的に取り上げた研究はほとんど見られない。William A. William, *Folklore and Nationalism*

in Modern Finland, Bloomington: Indiana University Press, 1976; Osmo Jussila, *Suomen historian suuret mytit*, Helsinki: WSOY, 2007.

(4) Vilho Niiteemaa, “Jalmari Jaakkola”, *Historiallinen Aikakauskirja*, 1964, s. 3.

(5) Päivio Tommila and Aura Korppi-Tommola eds., *Research in Finland: A History*, Helsinki: Helsinki University Press and the Federation of Finnish Learned Societies, 2006, p. 49.

(6) SKS pöytäkirjat v.1923-1924, 6032 C88.

(7) Jalmari Jaakkola, *Suomen varhaisistoria: Heimokausi ja «Kalevalakulttuuri»*, Porvoo: WSOY, 1935. ヤーッコラは同書以降「フィンランド史叢書」のフィンランド中世史に関し「その四冊を出版する」。Jaakkola, *Suomen varhaiskeskiäika: Kristillisen Suomen synty*, SHS: Helsinki, 1938; Jaakkola, *Suomen sydänkeskiäika: Iltään synty ja vakiintuminen*, Porvoo: WSOY, 1944; Jaakkola, *Suomen myöhäkeskiäika I: Unionin alkukausi*, Porvoo: WSOY, 1950; Jaakkola, *Suomen myöhäkeskiäika II*, Porvoo: WSOY, 1959.

(8) Jalmari Jaakkola, *Suomen historian äänneä*, Porvoo: WSOY, 1940, s. 38-57.

(9) *Ibid.*, s. 43-44.

(10) *Ibid.*, s. 44.

(11) *Ibid.*, s. 45-46.

(12) 現在のサタラント東部の地域を指す。

(13) *Ibid.*, s. 46. しかし、これらの地域の農産物は当時の世

界経済にとって重要な意味を持たず、フィンランド内部のみにその影響が限定されることも指摘する。

- (14) サタクンタと西フィンランドの都市ピルツカラの間を流れる川を指す。

(15) *Ibid.*

(16) *Ibid.*, s. 47-48.

- (17) *Ibid.*, s. 48-49. ヤーッコラは異教時代を八〇〇年から一〇〇〇年代と定義したのに対し、この「キリスト教時代」とは一二〇〇年代以降を指すと推測できよう。

(18) カレワラには「宇宙」鍛冶屋イルマリネンが、妻を失った悲しみのあまり金の花嫁を鑄造するという話がある。スタルカッドとは古代スカンディナヴィアの神話に登場する英雄を指す。

(19) *Ibid.*

- (20) ラムサユに於ける、これらの地域は地層的に区別される。Antto Leikola, *Koitokäsinetti*, Porvoo: WSOY, 1986, s. 137-138 を参照。

(21) Väinö Voionmaa, *Suomen uusi asema : maantieteellistä ja historiallista peruspöytäkartta*, Porvoo: WSOY, 1919. 同書でヴオイオンマアは、この「フェンノ・スカンディア」という用語を用いることで、コラ半島及びロシア・カレリアを含めた「自然のフィンランド (Luonnollinen Suomi)」の存在を主張した。Mari Vares, “Luonnollinen Suomi: käsityksiä Suomen sijainnista ja suuruudesta” 1917-44”, *HA*, 2010, s. 50.

(22) Jaakkola 1940, s. 7-8.

(23) Jalmari Jaakkola, *Suomen varhaishistoria: Heinokuu-*

si ja Kalevalakulttuuri, Porvoo: WSOY, 1935, s. 150.

(24) Jaakkola 1940, s. 9.

(25) *Ibid.*, s. 10-12.

(26) *Ibid.*, s. 25-27.

(27) *Ibid.*, s. 12.

(28) *Ibid.*, s. 25-27.

(29) Jalmari Jaakkola, “Maamme vanhoista valtarajoista”, *HA*, Helsinki: SHS, 1926, s. 192-210.

(30) Jaakkola 1933, s. 122-124.

(31) *Ibid.*

(32) 第八章「フィンランド公国から政治的フェンノ・スカンディアへ」において、同様の主張が展開される。Jaakkola 1940, s. 80-90.

(33) Jussila, *op. cit.*, s. 212-222.

(34) 帝政アレクサンデル大学（ヘルシンキ大学）の神学部では、一八八〇年代からすでに八〇%もの宗教学の授業および学生の母語は、フィンランド語であり、他の学部よりフィンランド語の授業が多かった。詳細は、タリヤヘリーサー・ルーカネン著、石野裕子訳「一八三〇年代の新しいフィンランド知識人とナシヨナリズムの影響回路」橋本伸也編著『ロシア帝国の民族知識人』昭和堂、近刊を参照。

(35) アイラ・ケミライネンによると、フィンランド人知識人の間でも「アジア起源説」について様々な議論がなされていた。例えば、ロシア統治時代に活躍した、フィンランドを代表する知識人であり、フィン・ウゴル語の専門家であったマテイアス・アレクサンテリ・カステレンは、フィン・ウゴル語とモンゴル語の近親性は指摘したものの、フィン

独立フィンランドにおける自国史の「創造」(石野)

ランド人自体は「軽蔑されたモンゴル人」と関係がないと主張した。Aira, Kemiläinen, *Fins in the shadow of the "Aryans"*, *Studia Historica* 59, Helsinki: SHS, 1998, p. 65.

(36) 内線の傷跡は、その後、歴史学においても大きな傷跡を残し、勝者側の歴史認識が近年まで通史となっていた。詳細は、拙稿『フィンランドの内戦認識の変遷について』『地域研究』第二巻第一号、京都大学地域研究統合情報センター、二〇一一年を参照。

(37) 特に一九二二年に大学生を中心として結成されたカレリア学徒会 (Akateeminen Karyala-Seura: AKS) が全国的な活動を展開した。

(38) Jaakkola 1940: Esipuhe.

(39) 石野、上掲書、一三五—一三九頁を参照。

本稿は、JSPS 科研費 24330055、24720157 の助成を受けた。

(金沢大学先端科学・イノベーション推進機構博士研究員)